

## ラヴィルマルケとリユーゼル（五）

—いわゆる「バルザズ・ブレイス論争」について—

梁川英俊

### VIII 「バルザズ・ブレイス論争」の始まり

#### 新しい民衆歌集の構想

『聖トリフィーヌ』の出版後、リユーゼルが新たな目標として定めたのは民衆歌集の出版だった。前にも触れたように、彼の民衆歌の採集歴は長く、すでに一八四〇年代から始まっていた。ブルターニュ演劇の写本の調査が一段落した後、その関心が民衆歌に向かったのも当然のことだったのである。一八六五年八月、彼はルナンに宛てて、民衆歌の調査のための助成金を獲得する可能性を打診する。同じ書簡で彼はまた、良い図書館のあるブルターニュの町かパリへの転勤の希望も仄めかしていた。一八六二年に不本意な理由でカンペールのコレージュを去ってからはしばらく教職を離れていた彼は、一八六四年十月にコレージュの教師としてロリアンに赴任していたが、給料も上がらぬまま仕事の量のみが増えることへの不満を抑えきれなくなったのである。しかしこの二つの願いは、ルナンの尽力にもかかわらずなかなか叶えられなかった。六六年一月、リユーゼルはルナン宛ての書簡で再度助成金に言及して、こう言う。

公教育相がこの調査を援助してくれ、『バルザズ・ブレイス』のいわば補遺をなす歌集の出版を資金面で助けてくれれば嬉しく思います。ご存知のように、ラヴィルマルケがその文学的知識の最良の束を持ち帰った畑は大変に豊かで、なお収穫すべきものに溢れているのです(1)。

しかし彼が公教育相から受け取った返事は、本年度は財政難のためいかなる調査にも援助をするわけにはいかないという厳しいものだった。折り返しリユールは、助成金なしの有給休暇による調査の可能性を打診する。が、これもロリアンのコレージュの財政難を理由に拒否されてしまう。翌六七年二月、リユールはルナンに宛ててこう書く。

公教育相にバス・ブルターニュ地方の文学に関する調査のための助成金の申請をしてから、もうすぐ三ヶ月になります。目的はこの地方でなお歌われているあらゆる種類の民衆歌の採集で、そうした歌はいまも先祖たちの歌や伝承を記憶している最後のブルトン人とともに、近い将来、永久に消え去ってしまったのではないかと危惧されるのです。(……)

二〇年以上前から、私は田舎で民衆歌の採集を続けていて、それもすでにかなりの数に達しており、中には大変興味深いものもあります。私はそうした歌を出版して、手直ししたり、付け加えたり、作り変えたりということが一切ない、真の意味で民衆的なブルトン語の歌集を作りたかったのです。(……)しかしこの仕事をよい条件で行うためには、もう数ヶ月田舎を駆け回り、さらに歌のヴァージョンを豊かにすべく、他の地域で異なったヴァージョンの歌を採集しなければなりません(2)。

先の書簡で、自分の歌集を「『バルザズ・ブレイス』のいわば補遺をなす歌集」と位置付けていたりユーゼルは、この書簡ではそれを「手直ししたり、付け加えたり、作り変えたりということが一切ない、真の意味で民衆的なブルトン語の歌集」と呼んでいる。この名称の変化は、この一年ばかりの間にリユーゼルの意識に起こった変化を明らかに示していた。では、その変化とはどのようなものだったのか。

### 『バルザズ・ブレイス』第三版

一八六七年初頭、『バルザズ・ブレイス』は久々に改訂され、新たな装いで世に出る。第二版が出てからほぼ二〇年ぶりのことだった。しかしこの版に新しく付け加わった歌は少なかった。それは「歴史的な歌」では二篇（「ゆりかごのメルラン」と「メルランの改宗」、従来は「愛の歌」という分類であった「祭りの歌と愛の歌」では一篇と、全体でわずか三篇にとどまった。巻末に付けられた楽譜の数は、旧版に比べて四七から七四へと大きく増えていたものの、その内容において新版は旧版とほとんど変わるところがなかったのである。

大きな変更があったのは、むしろその体裁であった。それまで二巻本であったのが、この版では一巻にまとめられ、左ページにブルトン語原文、右ページにフランス語翻訳という従来の形式も改められて、新版ではフランス語の翻訳が大きく印刷され、ブルトン語の原文はページ下に小さな活字で印刷されていた。つまり新版では、旧版では対等であったブルトン語とフランス語の関係が、はっきりとフランス語を重視する方向へと変わっていたのである。新しい『バルザズ・ブレイス』が対象としていたのは、紛れもなくフランス人の読者であった。

新版は一般には好意的に迎えられたが、専門家の反応は幾分異なっていた。なによりも改版までの二〇年の歳月は、口承文学の研究にいっそうの厳密さをもたらさずにはおかなかった。それを示すのが、一八六七年二月十六日発行の『歴史・

文学批評』 *Revue critique d'Histoire et de Littérature* に掲載された二つの書評である。まずアルボア・ド・ジュバンヴィル Arbois de Jubainville は、『バルザズ・ブレイス』に収録された歌の文学的価値を称賛する一方で、その文献学的内容の不十分さをこう指摘していた。

まずわれわれにとって残念なのは、著者が出版した歌が、もっぱら歴史的・美的関心から選ばれていることだ。(……) ブルターニユの文学のような貧しい文学を対象とするとき、基準はもつと緩やかな方がいいのではないか(……)。ド・ラヴィルマルケ氏がこの新しい版でヴァリアントを掲載せず、ルゴニーデックが無視した文法形式の批判的検討や、この学者の『ブルトン語フランス語辞典』に欠けていた単語の用語解説を付け加えなかったことが悔やまれる(3)。

いまひとつ、ポール・メイエ Paul Meyer による書評には、ジュバンヴィルのもの以上に具体的な批判が含まれていた。彼はまず『バルザズ・ブレイス』の初版の出版から新版の登場までの間に民衆歌の研究に起こった変化を顧みてこう言っていた。

『バルザズ・ブレイス』の初版は、ド・ラヴィルマルケ氏がそうしたように、文学的でありブルターニユ的でなければならなかった(……)。しかし『バルザズ・ブレイス』の後に出版された多種多様な起源の歌集との比較は、幾つかの新しい観点を浮かび上がらせ、いまやその観点を無視して民衆歌について語ることはますます困難になっている。美的関心が徐々に批判的要求に道を譲っているのである(4)。

一八三九年、ロマン主義の時代に二十四歳の青年が発表した歌集は、彼が五十二歳になったいま、明らかに時代の学問的要求を満たし得ないものとなっていたのである。しかし、にもかかわらず『バルザズ・ブレイス』の著者は、初版から二八年間、その姿勢を変えず、また提出された疑問に答えようとしめない。メイエが問題にしたのはこの無策であった。彼は著者が新版すべきであったことをこう列挙した。

これ以上反論を増やしても仕方あるまい。あとは『バルザズ・ブレイス』を科学の名に値するものにするためにはどうすればいいかを言うだけだ。テキストについては、もっとも古いと思われるヴァージョンに従って歌を提示しなければなるまい。注にヴァリアントを掲載し、ヴァリアントはやむを得ぬときにしか本文のなかに入れてはならないし、その場合は読者にその旨告知しなければならぬ。説明については、『バルザズ・ブレイス』の初版の出版当時には価値をもったが、その後の民衆歌に関する比較研究の成果と矛盾を来たようになった仮説は、すべて廃棄しなければなるまい<sup>(5)</sup>。

『バルザズ・ブレイス』第三版の出版は、それまで過去のものとして語られがちであったこの歌集を、再び現在の出来事として捉え直す契機となった。その意味で、この新版の登場は、「バルザズ・ブレイス論争」の真の開幕を告げる合図であったと言える。ルメンはこの前年、すでにこの歌集について多くの疑念を口にしていたりユーゼルにこう書いていた。「彼が『バルザズ・ブレイス』の新版を出すまで待つていれればいいのです。そうすれば、彼が犯した過ちを指摘したり、あなたが発見したペテンを明るみに出したりする機会も自然にやって来ることでしょう<sup>(6)</sup>」。

## 『バルザズ・ブレイス』への疑念

それにしても、リユーゼルはいつから『バルザズ・ブレイス』に疑念を抱くようになったのか。すでに見たように、少なくとも一八六〇年代の初頭まで、『バルザズ・ブレイス』は彼の枕頭の書であった。ラヴィルマルケと写本をめぐって争った「聖トリフィーヌ事件」においても、彼はラヴィルマルケに対して個人的な不信感をあらわにすることはあっても、それを『バルザズ・ブレイス』にまで向けようとはしなかった。その彼が、なぜここに来てその「誤り」や「ペテン」について語るようになったのだろうか。

最初の兆候が見られるのは、一八六六年四月十日付けのルナン宛の書簡である。リユーゼルはそこで自分が準備している歌集の説明をしながら『バルザズ・ブレイス』に言及し、その著者を前世紀に贋作疑惑でヨーロッパ中を騒がせた『オシアン』の著者になぞらえて、「われらが新しいマクファアソン」と呼んでいた。もつとも、この書簡はその呼称の理由については語っていない。それが語られるのは、翌六七年七月二十四日付の同じルナン宛ての書簡においてである。彼はこう言っていた。「『バルザズ・ブレイス』の著者は、ほとんどいたるところで手を加え、改竄し、捻じ曲げ、通りをよくしたり穴を埋めたりしています。たくさんの歌をその本来の方向から切り離し、なんとしてでもわれわれのブルターニュで起きた重大事件と関連づけようとするのです。加えて、私は彼の歌のうちもつとも古いものは彼のでっちあげだと考えています<sup>(7)</sup>」。

この書簡を皮切りに、リユーゼルは堰を切ったように、ルナンに『バルザズ・ブレイス』に対する批判を繰り返すようになる。ところで、こうした批判の大半が、六七年に書かれていることに注意するべきだろう。この年、リユーゼルは「私の『バルザズ・ブレイス』」と呼ぶ民衆歌集の制作に没頭していた。彼の『バルザズ・ブレイス』に対する疑いは、おそらくこの歌集の計画とともに芽生え、その進行につれて大きくなっていったのである。同年九月五日の手紙で、彼はこう

語る。「仕事が進めば進むほど、ラヴィルマルケ氏がブルターニュでマクファーソンの役を演じており、われわれを四半世紀に渡って騙してきたのだという感を深くします。この抜け目ない男は巧妙な山師なのです」。

では、どう「巧妙」なのか。リユーゼルはそれを歌集の冒頭に置かれた「連」*Les Series* という歌でこう説明する。

私はブルターニュのあちこちで、この歌のヴァージョンを八つ採集しましたが、そのすべてが同じ「蛙の晩課」*Gousperou ar Ramed* という題で、まともな意味などない、延々と続く支離滅裂体なのです。私から見れば、これは明らかに単なる遊びであり、完全押韻を探すための農民の訓練で（実際、私が採集したヴァージョンでは、押韻はこれ以上ないほど完全です）、意味だの理由だのを気にする必要のないものです。それはこの歌が「蛙の晩課」と呼ばれることを考えても、十分に明らかではないですか。運命や宇宙論や地理や魔術や輪廻などに関するドルイドの教義を開陳しているなんてとんでもない。

つまり、ラヴィルマルケはもともと何の意味もない支離滅裂な問答歌を、意図的にケルトの古代と関連づけるために、オリジナルの内容に手を加えたというのである。そればかりではない。彼はまた歌でブルターニュの歴史をつくるという目的を達成すべく、現実には存在してもいない幾つかの歌を捏造しさえしたのである。リユーゼルはこう続ける。

グエンフランやメルランやアーサーやノミノエやガリア人のワインやレズ・ブレイス（創られた名前ですが）等に関する歌については、問題はさらに厄介だと思われます。二十年以上、あちこちで民衆歌を採集してきましたが、こうした歌など一節も聴いたことがありません。歌われている人物の名前すら聞き覚えがないのです。いろんな人に訊ねてみ

ましたが、答えは皆一緒です。歌も名前も聞いたことがないというのです。正直に申し上げて、これが私がこうした歌の存在を疑う唯一の理由です<sup>(10)</sup>。

実際、この年、リユーゼルは友人知己に手紙を出し、こうした歌を実際に聴いたことがあるかと訊ねていた。たとえば、詩人のプロスペル・プルー Prosper Proux は彼にこう返答した。「私はブルターニュのあちこちに住みましたが、そこでゲンフランやアーサーやミノエやメルランやレズ・ブレイスの名前が口にされるのを一度だつて聴いたことがあります。加えて言えば、こうした輝かしい名前が出てくる歌も断片も採集したことはありません<sup>(11)</sup>」。つまりリユーゼルは、この時期、ラヴィルマルケに対する一連の疑惑の正当性をリアルタイムで確認しつつあったのである。書簡の口調が多少興奮したものになるのも無理はなかったのである。もつとも、書簡が伝えていたのはリユーゼルの興奮ばかりではなかった。それはまた、厄介な出来事を前にした彼の不安や困惑も隠さずに伝えていたのである。リユーゼルはこう語る。

私はラヴィルマルケ氏の手口や欺瞞を明らかにしなければならぬでしょうか。正面から攻撃すべきでしょうか、あるいはただ自分の歌集を出し、それを批評に委ねるだけに留めておくべきでしょうか。しかしブルトン語文学に通じている人はわずかしきありません。そしてラヴィルマルケ氏はそのなかでもつとも影響力があり、策士なのです。だからこそ助言をお願いしているのです。私は困っているのですから。しかも、私はまたこの仕事が自分の力や知識を超えているのではないかと感じているのです。(……)この妙な男が私たちを騙しているということは分かるのですが、ではどれほど騙しているのか、それについて何を言えるかということになると、よく分らないのですから<sup>(12)</sup>。



## ルナンの反応とルメンの転向

こうしたリユーゼルの問いかけに、ルナンは九月二十二日付ですぐに次のような返答を送った。

民衆歌の出版に関して、私のできる助言は二つだけです。科学の最高の掟は絶対的な誠実さです。思うことをすべて口にしてかまいませんが、その場合、個人攻撃はいけません。千年も二千年も前につくられた歌のコレクションを相手にするかのよう、問題を議論してみてください。私もあなたと同様、ド・ラヴィルマルケ氏はしばしば自分勝手な解釈をして歌を聴き、種々の先入観に捉われて、自分の学説に合うヴァージョンを提出し、望むままの歴史的なこじつけを行ったと思っています。批判的・文献学的観点からすれば、その仕事は無価値です。しかし、だからといって私は彼がそれを自分で作ったとは思いませんし、故意に改竄や加筆を行ったとも思いません。私の『ケルト民族の詩歌』はお読みになりましたよね。そのことについては、たぶん個人的にあれこれと気遣いながら、でも重要なことはちゃんと指摘しつつ、そこに書いたはずですよ<sup>(13)</sup>。

ルナンの立場は明確だった。彼はときに感情論に走りがちなりユーゼルに対して、作者を攻撃するのではなく、あくまでも作品を客観的に論じるように注意を促す。そのうえで、彼はラヴィルマルケの解釈が先入観から来る恣意的なものだという点には同意しつつも、それが意図的な贋作であるという意見に対しては、はっきりと異議を唱えるのである。この点で、その主張は『ケルト民族の詩歌』以来、まったく変わっていないと言っている。一方、リユーゼルはテキストの背後にラヴィルマルケの意図を想定せずにはいられない。彼はルナンの寛容さに苛立ちながら、こう返答する。

いまこそその奸計が暴かれ、真理が知られるべきときです。繰り返しますが、必ず、同じ巧妙さと同じ手口と同じ想像力をもつ、もうひとりのマクファーンソンが発見されることになる。私は断言できます。あなたは「彼はしばしば自分勝手な解釈をして歌を聴き、種々の先入観に捉われて、自分の学説に合うヴァージョンを提出し、望むままの歴史的なこじつけを行った」と言いながら、彼に対してはあまり厳しくないようです。が、それだけでもすでにかなり重大なことです。ことは歴史に関わるのですから。歴史的な歌は歴史として、徹底的に誠実に扱われ、検討されなければなりません<sup>(14)</sup>。

ルナンの忠言にもかかわらず、リユーゼルはラヴィルマルケが故意に歴史をねじ曲げたという疑念を払拭することができない。そして、こうした彼のこだわりの裏には、ラヴィルマルケがブルターニュの貴族と聖職者たちからなる一個のグループの代表だという意識があった。リユーゼルにとつて『バルザズ・ブレイス』とは、「『ルヴユ・ド・ブルターニュ・エ・ド・ヴァンデ』 *Revue de Bretagne et de Vendée* とその取り巻きード・ラヴィルマルケ、ド・ラボルドリー、シャルルド・ゴール、ド・ケルドレル等一の党派性と教条主義と偏狭で不寛容な精神<sup>(15)</sup>」の象徴にほかならなかつたのである。彼は言う。「この人たちとその身内が不幸にもブルターニュの出版界のほぼすべてを牛耳っているために、どんな新聞や文集も彼らの監督と検閲を経ずに出版することはできないのです<sup>(16)</sup>」。

それにしても、リユーゼルはかつて「私以上に『バルザズ・ブレイス』を愛し、心酔している者はいない」と書き、それが作り物であるという非難に対しては「こうした非難は的外れであるとはつきり主張することができる」とまで語ってそれを擁護した人であった。その同じ人が、今度は『バルザズ・ブレイス』批判の先頭に立とうとするのである。

もつとも、同じ頃、同様の転向をした人物はほかにもいた。たとえば、当時『カトリコン』の出版を準備していたカン

ペールの古文書保管人ルメンである。のちに「バルザズ・ブレイス論争」で重要な役割を果たすことになるこの人は、六年六月にリユーゼルにこう書き送っていた。

哀れなバルドよ、あなたはこれがブルターニュ文学にとって死活問題だということが分からないのですか。『バルザズ・ブレイス』のオリジナリティーに向けられたわずかな攻撃も、ウエールズのバルドの作品を襲った信用の低下と同様の信用の低下をわれわれの古い歌にもたらすということが。(……) そう、私はバルドではありませんから、もしあなたがこの危険な土俵で一悶着起こせば、ラヴィルマルケの陣営に付いてあなたと戦うと断言しておきますよ。人間は好きなように攻撃してかまいません。所詮は弱いものですから。でも『バルザズ・ブレイス』の歌には手を触れてはいけません<sup>(17)</sup>。

このルメンの反応は、当時のブルターニュにおける『バルザズ・ブレイス』の「不可侵性」をよく伝えていた。そして、それはまた、おそらくリユーゼルが当初この歌集を擁護した主要な理由でもあったはずだった<sup>(18)</sup>。が、こうした強硬な姿勢が和らぐのに時間はかからなかった。翌年八月、リユーゼルはルメンから次のような書簡を受け取る。

私が『バルザズ・ブレイス』を研究すればするほど、その欺瞞はますます明らかになってきます。いままで、これほど私が自分の考えを言わねばと感じたことはありません。でもその前に、この地方でもっとも事情に通じた人たちの証言によって、自分の意見の裏を取っておきたいのです。あなたは私に、あなたがラヴィルマルケによって作られた「歴史的」とされる歌に出会ったことがないということを、他の人に公言してもいいと言ってくれました。(……) たぶん

お話ししたことはないと思いますが、一八五三年に、私は「ガリア人のワイン」が歌われるのを聴きたくて、トレグレスの旅籠で日曜日をほぼ丸一日過ごしました。ざっと三〇人の農民がいましたが、この有名な歌を少しでも知っているという人はひとりもいませんでした<sup>(19)</sup>。

ルメンは『バルザズ・ブレイス』の真正性に疑念を投げかけるのみではない。彼はその疑いを人々に知らせることを望みさえするのである。その手段として彼が選んだのは、自らが校訂する『カトリコン』の「序文」であった。そしてこの「序文」は、この年の秋にサン・ブリューで開催される「国際ケルト大会」Congrès celtique international に大きな混乱を引き起こすことになる。

#### サン・ブリューの国際ケルト大会

一八六七年十月十五日にサン・ブリューで始まった国際ケルト大会は、ケルト圏の国や地域の代表を一同に会させるべく、ラヴィルマルケが中心となって企画されたものであった。一八六七年に七月、リユーゼルはルナンに宛ての書簡でこう書いていた。

九月中旬、サン・ブリューで国際ケルト学会があり、ウェールズのバルドや学者たちがわれわれと友人となるべく大挙して押し寄せるでしょう。私はラヴィルマルケから、伝統的な様式に則って、そこで『聖トリフィヌ』をブルトン語で上演してくれと頼まれているのです。きっと素晴らしいお祭りになるでしょう。どのみち、もうすぐですが。私としては、嬉しい気持ちでいっぱいです。まず海の向こうのブリトン人と親交を結べるからであり、いまひとつは、それ

がブルターニュで何か真面目なこと——たとえば、毎年の集会とか、特別な報告書とか——を組織しようとするいい機会になるのではないかと思うからです<sup>(20)</sup>。

この大会の招待状は事前にケルト圏のあらゆる学術団体に送付されていた。しかし、蓋を開けてみると海外からの参加者は少なく、しかもその大半はウェールズからの参加者であった。もっとも歓迎を受けたのは、一八三八年にラヴィルマルケがアイステズヴォッドに参加すべくアベルガヴェニーを訪れたとき、ラノーヴァー城で彼らを歓迎して演奏を披露した盲目のハーピスト、トマス・グリフィス Thomas Gruffydd であった。彼が娘のスザンナに手を引かれて、ともに民族衣装で現れたときには、会場は大きな喝采に包まれたという。会期中はケルトにまつわるオブジェの展示会や遺跡を訪ねる遠足のほか、リユーゼルが依頼された『聖トリフィーヌ』の上演も企画されていた。しかし、リユーゼルが「素晴らしきお祭りになる」と期待したこの大会は、開会の前日にサン・ブリューの書店の店頭に並んだ、ルメンの校訂になる『カトリコン』の衝撃によって波乱のうちに幕を開けることになる。

混乱の原因は校訂者の「序文」にあった。ルメンはそこで、ラヴィルマルケが編纂したルゴニーデックの『ブルトン語フランス語辞典』で、『カトリコン』からの引用にいかにも多くの誤りや綴り字の歪曲等があるかを指摘した後、註のなかで『バルザズ・ブレイス』に言及してこう書いていた。

この歌集の成功は著者の想像力の賜物であり、文学的・歴史的な観点から見れば真正さの欠片もない。実際、この歌集を構成する歌のうち、ゲエンフラン、イスの町、ガリア人のワイン、アーサー、レズ・ブレイス、ノミノエ等々にまつわる歌は、ド・ラヴィルマルケ氏の作り物である。こうした歌の痕跡を見つけようと、むなしい努力が続けられた。

が、現実になれわれの田舎に存在している歌は、古めかしい歌に見せよう（これがド・ラヴィルマルケ氏がもっとも配慮していたことだ）という意図をもった博識な編者の手によって改竄され、本歌とは似ても似つかぬものになっている。（……）歌集の冒頭に置かれた「連」という歌について言えば、われわれはブルトン語圏のブルターニュのさまざまな地方で十のヴァージョンを採集した。そのうえでこう断言できる。第一に、この歌の本当の題名は「蛙の晩課」であり、第二に、そこにはドルイドもその教義もヴァンヌの町も出てこず、歴史的な歌や哲学的な内容をもつものであるどころか、単なる記憶の訓練のための、脈絡のないつまらない文章の寄せ集めにすぎないのである。（……）脈絡のない想像力が越えてはいけない限界というものがある。バルドでも大バルドでも演じればいい。お気に召すならドルイドの振りもするがいい。しかし自分の発明で歴史を歪めようとしてはならない。真実は遅かれ早かれ明らかになる。そして、あなたの不誠実な試みからは軽蔑しか残らないだろう（21）。

大会の中心人物を狙ったこの文章は、ルメン自身が言ったように、「爆弾のような効果（22）」を生んだ。ラヴィルマルケはすぐにこの書物の販売を停止させるよう命じ、ルメンを名誉毀損で訴えろと言った。書店は販売を停止したが、ラヴィルマルケが受けたダメージは大きかった（23）。しかも、彼の受難はこれに止まらなかった。数日後、ある分科会に出席したラヴィルマルケは、今度は自分の前で歌集の真正性が問われる場面に立ち会うことになる。

そのとき演壇にいたのは、アレガン博士という人物であった。このアレガン博士、すなわちユージェーヌ・ルイ・マリー・アレガン Eugène-Louis-Marie Halléguen は、シャトールラン在住の医者であったが、医業のかたわら長く考古学に関心を抱き、パリや地元の考古学協会の会員に名を連ねてもいた。とりわけローマ時代の遺跡に通じ、三年前に『アルモリカとブルターニュ』 *Armorique et Bretagne* という二巻本の大著を上梓したばかりだった。報告のなかで、彼はまず執筆中

の著書『アルモリカ文学史』から一部を紹介し、ローマ人によるガリア征服以来、ガリアとアルモリカでは共通の言語が話されており、ブルトン語とロマンス語は十二世紀になって初めてその言語から分離したとするその独特の学説を披瀝したのち<sup>(24)</sup>、最後に『バルザズ・ブレイス』について触れ、こう語った。

『バルザズ・ブレイス』の第一部、すなわち神話的で英雄的な歌に収録された、いずれ劣らぬ見事な歌のなかでもとりわけ素晴らしい作品を味わえば、通人ならこう考えます。「これは当たり前の意味で、原始的で素朴な民衆歌ではない。作者の名誉となる巧妙な創作なのだ」と。(……)彼が敬虔な母親の影響の下で描いた祖国の肖像が美しすぎるものであつたとしても、最初にそれを描いた人に対する配慮をもってそれを修正するのが、時間と経験と批評の役目なのです<sup>(25)</sup>。

『バルザズ・ブレイス』は「巧妙な創作」であり「美しすぎる」。その根拠としてアレガンは、リユーゼルやルメンと同様に、「蛙の晩課」を挙げた<sup>(26)</sup>。もつとも、アレガンはリユーゼルたちと違って、この歌が元々ドルイドの歌であつた可能性を否定せず、ラヴィルマルケの「連」がこの歌の存在によって打撃を受けることはまったく主張した。「蛙の晩課」はかつてあつたはずのドルイドの歌の民衆的なパロディーなのであり、そこには本歌を笑いものにして異教の教えを葬り去ろうとする悪意すら感じられるというのである。最後に、アレガンはこの真贋論争の解決策を、楽観的にこう提示した。

ド・ラヴィルマルケ氏は、自分の歌をどこで誰から採取したとちゃんと言わなかったのだ、ばらばらの断片をちゃんと整えて結び合わせなかったのだと非難されていますが、なんのことはありません。彼が何巻分にもなる膨大なヴァー

ジョンを持ってきて、他の人は他の人で自分の集めたヴァージョンを持ってきて、そのすべてを机の上に広げた上で、皆で真のブルトン人として、互いに比較し合つて公明正大に判断すればいいのです。中年は血氣盛んな若者ほど信じやすくも自信家でもありませんが、だからといつて驚いたり不平を言つたりする人がいるでしょうか<sup>(27)</sup>。

会場にいたラヴィルマルケは、この発言にどのように返答したのか。速記録に残されているのは、わずかに次のような言葉のみである。「ブルターニュの民衆歌に関しては、私は自分が公明正大かつ誠実に、テキストを突き合わせながら、歴史的・哲学的な真理を探したのだということ以外に付け加えるべきことはなにもありません<sup>(28)</sup>」。大会が終わつた後、リユーゼルはルナンにこう報告した。

ラヴィルマルケ氏の文学的<sup>・</sup>王位は、そのうち音を立てて崩れるに相違ありません。彼もまたそれを感じており、いま方々で仲間をつくらうとしています。彼は私や私の友人に対して大いに気を使い親切な態度を示すので、友人たちはいまにも彼の味方になりそうな具合です（もうなつているかもしれない）。彼は本当に人好きのする人間なのです。シャトーランのアレガン博士は大会の分科会のひとつで彼を非難しました。（……）大バルドの自己弁護には力がありませんでした。というよりも、彼はまったく弁解などしなかつたのです<sup>(29)</sup>。（……）皆は彼を気の毒に思い、それ以上追及しませんでした。アレガン氏などは彼の親友になつてしまつたようにも見受けられました。昼食の席では、博士にバルドの称号が与えられ、握手はもちろん抱擁さえ交わされました<sup>(30)</sup>。

もつともリユーゼルは、こうしたやり取りを間近に見ながら、自ら議論に参加することはなかつた。その姿勢はルメン



から「ラヴィルマルケが感傷的な自己弁護をしていたとき、あなたが立ち上がった、これまで『バルザズ・ブレイス』に収録されているような歌を採集したことは一度もないと公言しなかったのが残念です<sup>(31)</sup>」と難じられはしたが、少なくとも彼はルメンのような歌を採集した行為に走ることはけっしてなかった。「私はド・ラヴィルマルケ氏と論争するつもりはまるでありません。彼がブルターニュ文学にした現実の貢献は大いに認めた上で、慎みと節度をもって一緒に話をしたいただけなのです<sup>(32)</sup>」とルナンに宛てて語ったように、リューゼルはこの論争を通してつねに節度ある態度を保ったのである。このことは、書簡におけるその口調の激しさがしばしばこの事実を忘れさせるだけに、ここで記憶されてもいいだろう。

#### リューゼルの『バス・ブルターニュ地方の民衆歌』

一八六八年一月初め、リューゼルは自らの歌集『バス・ブルターニュ地方の民衆歌』*Gwerzïou Breiz-Izel, Chants populaires de la Basse-Bretagne*の予約者を募るために、パンフレットを起草する。歌集の印刷のために必要な経費は、千部で二四〇〇フラン。彼は当初二〇〇件程の予約を想定していたが、六八年四月の時点での申し込みはわずかに二〇件と予想を大幅に下回った。失望したリューゼルは、背後にラヴィルマルケ一派の影響を暗示しつつ、ルナンに宛ててこう書いた。「私は人々の無関心や、自分の愛国的で私信のない行為を哀れな失敗に終わらせようとする、あらゆる種類の敵意に満ちた心ない仕打ちを考慮に入れていなかったのです<sup>(33)</sup>」。

同年七月、リューゼルは歌集の「序文」を起草し、ルナンに意見を乞う。ルナンからの忠告は、ラヴィルマルケに対する論争的な口調を抑え、『バルザズ・ブレイス』への言及をできるだけ控えるようにというものだった。おそらくそのためであろう。「序文」の記述は二つの歌集の特徴を併記するだけの客観的なものになった。彼はこう語っていた。

この歌集は、これまでアルモリカのブルトン人の詩歌について出版された二番目の歌集である。最初の歌集は、人も知る、ド・ラヴィルマルケ氏の『バルザズ・ブレイス』である。しかしこの全ヨーロッパ的に知られた書物は、われわれの真に民衆的な詩歌について完全に正確な観念を与えるには不十分である。しかも、著者は一度としてそこにブレイス・イーゼルというわれわれの詩の土地で生まれ、いまなおそこで歌われている「グウェルス」や「ソーン」をすべて収録したとは主張しなかった。(……) 『バス・ブルターニユ地方の民衆歌』は『バルザズ・ブレイス』と重複するものでもなければ、それを補完するものでもない。その主な理由は、私が採った方法がラヴィルマルケのそれと異なるからだ。

『バルザズ・ブレイス』の博識な著者は、すべての人が認めるように、面白さと詩に満ちた魅力的な書物を作り上げた。それはすでに古典である。しかし、この作品は歴史である以上に文学である、ということもまた言っておかなければならない。そこで著者は、厳密な学問と見なされる批判的検討や文献学の要求にすべて従ったわけではない。一方、私が達成しようとしたのは正反対の目標だ。私が出発した原則は、民衆歌は真に歴史に属するもの、少なくとも文学的、知的かつ道徳的な歴史に属するものであり、そうである以上、その精神や字句を別な風に変更することは許されないというものである(34)。

「序文」はさらに、歌集が古い歌やブルターニユの正史を飾る事件に関する歌をほとんど含まないこと、歌われたことを磨いたり古めかしくしたりせず、そのまま提示したこと、フランス語の翻訳は優雅さよりもブルトン語への忠実さを重視したことなど、歌集の編集方針を列挙していた。その口調は控えめで、『バルザズ・ブレイス』をいたずらに批判す

ることもなかった。しかし、にもかかわらず、著者自らがラヴィルマルケと「正反対」と語るその方法は、この歌集をそれ自体で『バルザズ・ブレイス』に対する確固たる批判ともしていたのである。「序文」はこう語る。

私が二〇年以上も準備してきたこの書物に収録されているのは、したがって私がアルモリカの田舎で見つけ、いまなおそのままの姿で見出すことができるような、バス・ブルターニュ地方の民衆歌である。それはしばしば不完全であったり、損なわれていたり、付け加えられたり、不規則であったり、奇妙であったりするし、美しさと下品さ、多少その野蛮さが匂う趣味の悪さと粗野さと、優しくて感傷的で、つねに人間的な、素朴で自然な詩情とが独特に混ざり合っていて、それが直接心に響き、なぜか理由は分からないが、芸術的な詩以上に、私たちを面白がらせたり感動させたりするのである。そしてこれこそが、こうした自然な歌のうちに脈打つ、ブルトン人の心そのものなのだ<sup>(36)</sup>。

『バルザズ・ブレイス』にはあつて、リュージェルの歌集にはまったく見当たらなかったもの、それはかつてジョルジュ・サンドをして「ホメロスに比肩する」と言わしめたブルターニュの詩歌の「偉大さ」であつた。もちろん、このことに誰よりも自覚的であつたのは、他ならぬリュージェル自身であつた。「序文」のなかで、彼は「あらゆる面での不規則さとむらが多すぎるのに驚かないで欲しい」と断わつていたし、そもそも歌の不完全さに対する弁明はそこでもっとも多く言葉が費やされた部分であつた。こうした詩歌の大半は、なによりも、読み書きもできず、「ホラチウスやボワロー教えも知らない」人々の作品だったのである。リュージェルはこう弁明する。「私が不完全で不規則で、欠点だらけの作品を世に出したと非難する人には、こう答えるしかない。私は見つけた通りのものを、民衆のなかに現にあるものを、つまり本当の民衆歌を紹介しただけなのだ、と<sup>(36)</sup>」。

とはいえ、すでに引いた部分からも明らかのように、彼はそうした詩歌を魅力のないものだと考えてはいなかった。それどころか、彼はこうも語っていた。「私はわれらがブルターニュの詩歌のうちには、高度なインスピレーションと詩的感情、フランスの他の地方で普通に出会う詩歌よりもはるかに誠実で正直な調子を見いだすのである。どんな取るに足りない歌のなかにも、なにかしら詩と感情の精華があつて、それが作品全体に魅力と芳香を与え、抗し難い魅力となつてゐるのだ<sup>(37)</sup>」。

しかし、こうした考えは一般の共感を得るにはほど遠かつた。とくにラヴィルマルケの周辺ではそうだった。出版前にこの歌集の一部を目にしたラヴィルマルケは、腹心のガブリエル・ミリンに宛ててこう書いていた。「私は心安らかではありません。とくに、自分の国が侮辱されるのを見るとときには。顔を赤らめずには歌えないような薄汚いものを出版する恥知らずな人間がいるなんて、誰が考えたでしょう。可哀そうな祖国！ 真のブルトン人は皆、私たちと嘆きを共にするでしょう<sup>(38)</sup>」。一方、手紙を受け取ったミリンも、一八六八年三月、ルスクールに向けてこう書いた。「私は「グウェルス」の最初のノートを見ました。『バルザズ・ブレイス』の歌に比べると貧しくて物哀しいですね。同じ歌にヴァリアントが二つ三つあるようですが、なぜ一ダースではないのでしょうか<sup>(39)</sup>」。

しかし歌集の出版を誰よりも深刻に受け止めたのは、やはりラヴィルマルケ自身だった。そしてその深刻さは、彼をわざわざリユーゼルの家に赴かせるほどのものであった。一八六八年七月十九日付のルナン宛の書簡で、リユーゼルはラヴィルマルケの突然の来訪をこう伝えている。

少し前にド・ラヴィルマルケ氏の訪問を受けました。彼は私の非難の重大さと無謀さについて語り、意見に手心を加えるべきだと、身振り手振りを交え、ときに声を荒げながら話しました……。が、私が冷静さを保ち、「私には意見を

どないし、そもそもどんな慎ましい意見も持てるはずがない」と答えると、今度は静かになって調子を変え、とたんに愛想が良くなり、私にブルトン語の古い写本を貸してくれると、自分の家に来てそれを見ないかなどと言いつつ出しました。そして、悲しそうな、考え込んだような様子で帰っていききました。彼はいまでは（ほかにやりようがないので）、自分がいるんな人から奪い取った幾つかのヴァージョンを使って、手を加えたり、改変したり、補完したりして、テキストを作り上げたということを告白しようと決めており、彼の表現によれば、批評と趣味の権利によって、その手続きの正統性を主張しています。彼はいまやウォルター・スコットを引き合いに出しています。私は彼に、これはやり方の違いで、われわれは互いに相反する方法に従っており、両者の間で判断を下すのは批評の仕事だと言いました。完全に創作された作品については、彼はそれを認めようとせず、私が見つけていないからといってそれが存在しないことにはならないし、そもそも私は彼がそれを採集した場所に行つてさえないではないかと語っています<sup>(40)</sup>。

それにしても、ラヴィルマルケは何を望んでいたのか。自ら論敵のもとを訪れた以上、和解や話し合いを望んでいなかったはずはなからう。にもかかわらず、リユーゼルの手紙が伝えるのは両者の齟齬ばかりである。いや、二人の対立は、そもそも単なる文献学的方法の相違に帰着するような単純なものではなかった。たとえば、同年八月のルナン宛の手紙で、リユーゼルは「この書物を不道徳かつ猥褻で反宗教的なものとして、沈黙の内に葬り去つてしまおうという真の陰謀<sup>(41)</sup>」の存在に触れ、友人のジャン・マリー・ルジャン Jean-Marie Le Jean から受け取った一通の手紙を紹介していた。そこには、数年前に『イエス伝』*La Vie de Jésus* を出版してカトリックから激しい批判を浴びたルナンの名が引かれ、こう書かれていた。

あなたは第二のルナンと見なされています。あなたの本は最悪の結果を引き起こしました。(……) ルゴフィックによれば、ラニヨンとその周辺の聖職者は、ルゴフィック未亡人に彼女の書店であなたの本を売るのを禁じたそうです。彼らはそれが祖国に対する恥辱だと言うことに成功したわけです。なぜなら、彼らいわく、あなたはブルターニュのとも汚い部分を見せたのですから。(……) いまド・ラヴィルマルケ氏はかつてないほど称賛され、新たな後光で輝いています。あなたの本が出て以来、『パルザス・ブレイス』は大そう褒めそやされ、その著者は幾つかの歌に削除や訂正を加えてまともなものにしたとして称讃を浴びているのです<sup>(42)</sup>。

(つづく)

## 註

- (1) *Correspondance Luzel-Renan*, Presses Universitaires de Rennes/Terre de Brume, 1995, p.96.
- (2) *Ibid.*, pp.115-116.
- (3) Francis Gourvil, *Théodore-Claude-Henri Hersart de la Villemarqué et le «Barzaz-Breiz»*, Oberthur, 1960, p.172.
- (4) *Ibid.*, p.173.
- (5) *Ibid.*, p.175.
- (6) *Ibid.*, p.180.
- (7) *Correspondance Luzel-Renan*, p.119.
- (8) *Ibid.*, p.121.
- (9) *Ibid.*, p.122.

- (10) *Ibid.* なお、ここに挙げられている歌に関しては、リュューゼルは六七年十月四日付の手紙でまたこうも言っている。「もし彼が想像にもとづく文学作品を作ろうとしたなら、ご自由にといいるところですが、彼はそう主張してはいません。以下、反証として私の意見を開陳してみます。大変古い歌は大半が彼の手になるもので、真正正銘の贋作です。わたしは二十年以上民衆歌の収集に携ってきましたが、ラニオンやトレギエから八里から十里以内の場所で、「グエンフラン」や「剣の舞」や「アーサーの行進」や「メルラン」や「レズ・ブレイス」(民衆からレゾブレ *Lezobre* と呼ばれているデ・ゾブレ *Des Aubrays* という人に関するヴァージョンなら幾つか採集しましたが)や「ミノエ」の歌を一節だつて見つけたことはありません。こうした名前は人々に知られてさえないのです。逆に、私は『バルザズ・ブレイス』の歌を一三五ページから始まるほとんどすべての歌(「三〇人の戦争」を除く)のヴァージョンを複数集めました。しかも、そこにはかなりの数の大きな違いが認められます。こうした歌は実際に民衆の間で歌われているのですが、ド・ラヴィルマルケ氏が紹介しているような形ではありません。たいてい最初か終りに幾つかの節を付け加え、名前を変え、(歌に)種々の暴力を振るつてから、それをブルターニュの歴史を画す出来事や人物の名前に結びつけるのです。が、そうした歌は実際のところ、大半がかなり俗っぽい出来事や人物のことを歌ったものです。土地の貴族とか、民衆の誰かとか。というのも、あなたもよく言われているように、民衆のヒーローが歴史上のヒーローと一致することは稀だからです」。( *Ibid.*, p.130.)

(11) F. Gourvil, *op. cit.*, p.184.

(12) *Correspondance Luzel-Renan*, p.123.

(13) *Ibid.*, p.127. この手紙はルナンが『ケルト民族の詩歌』以外の場所で『バルザズ・ブレイス』に関する自説を明確に述べた、おそらくは唯一の資料である。

(14) *Ibid.*, pp.129-130.

(15) *Ibid.*, pp.123.

(16) *Ibid.*, pp.123-124.

(17) *Ibid.*

(18) この「不可侵性」について、ラヴィルマルケはたとえばこう言っていた。「私は「気をつけなさいよ」と言われました。「自分の力を過信してはいけないよ」「そのうち馬鹿を見ますよ」「土の壺で鉄の壺を攻撃するのですか！誰もあなたの言うことなど信じませんよ！」「ほう、『バルザズ・ブレイス』を攻撃するだって！私たちがもっているもつとも見事な本を！」「自分でブルトン人だとおっしゃるなら、自分の国を愛しているでしょうに！」しかし私は真実はいかなる考察にも勝るし、人がいかにそれを押しつぶそうとしても、真実はつねにいつかは勝つと確信しておりますので、こうした反論も気になりません。私の気を変えようというつもりなら、もっと強力で優れた反論が必要でしょう。」(Ibid., p.123.)

(19) F. Gourvil, *op. cit.*, p.184.

(20) *Correspondance Luzel-Renan*, p.120.

(21) F. Gourvil, *op. cit.*, pp.190-191; Jean-Jaques Boitron, « Gousperou ar Ramed » *ha gourspered « Ar Rannou »*, Skridou Dastum, 1993, p.474. なお、両者の引用には若干の異同がある。訳文で「第三に」という箇所(原文では3°)は、F. Gourvil の引用にはない。

(22) J.-J. Boitron, *op. cit.*, p.474.

(23) 結局、両者は大会後ルメンが自分の非を認め、元の註に内容を訂正した紙を貼ることで和解することになる。

(24) 五、六世紀のブリテン島の言語はラテン語化されたガリア語であるとするとするアレガン博士にとっては、ガリアとアルモリカこそがケルト民族の橋渡し役であり、ラヴィルマルケやラポルドリーが重視するブリテン島からの移民など些事にすぎなかったのである。(cf. *An Oaled*, 18<sup>e</sup> année-N° 68, 2<sup>e</sup> trimestre 1939, pp.127-128.)

(25) *Ibid.*, p.127.

(26) なお、この歌に関しては、アレガンはリュールとルメンから資料の提供を受けていたほか、自らも別のヴァージョンを採集していた。  
 上の文章については、*Correspondance Luzel-Renan*, p.134 を参照のこと。

(27) F. Gourvil, *op. cit.*, p.187.

(28) *An Oaled*, p.129; F. Gourvil, *op. cit.*, p.186.



(29) リューゼルはこの後、ラヴィルマルケの発言として次のような言葉を紹介している。「初版を出したとき、私はまだ若かったのです。二十歳でした。私はこの年頃の若者がふつうするように力説しただけです。いまでは私の髭も白くなり、それなりに経験も積んだので、以前ほど力説するようなことはありません」。しかし、グルヴィルによれば、この会議の議事録にこのような発言はなく、リューゼルが彼の幾つかの発言をひとつにまとめたのだろうと考えている。(F. Gourvil, *op. cit.*, p.198) ちなみに、類似の発言で議事録に掲載されているのは、次のようなものである。「私は自分が主張することを絶対正しいなんて主張したことは一度もありません。若い頃、私は自分が正しいと言い過ぎました。しかし、以来、私はずいぶん用心深くなったのです」。もっとも、この発言が直接『バルザズ・ブレイス』に關して言われたものではないことは、付け加えておく必要がある。

(30) *Ibid.*, pp.133-134.

(31) F. Gourvil, *op. cit.*, p.188.

(32) *Correspondance Luzel-Renan*, p.136.

(33) *Ibid.*, p.139. とはいえ、最初に歌集の予約金を送ってきたのはラヴィルマルケだった。加えて言えば、彼はこの頃、二年前に寄贈されて十分な対応をしなかったためリューゼルを苛立たせた、詩集『つねにブルトン人』についても一文を起草しようと考えていたという。彼はリューゼルとの関係を修復したいと考えていたのだろうか。(cf. F. Gourvil, *op. cit.*, p.197)

(34) F.M. Luzel, *Chants et chansons populaires de la Basse-Bretagne, Gwerziou I, Réimpression de l'édition 1868-1890 présentée par Donatien Laurent, Maisonneuve&Larose, 1971, II.*

(35) *Ibid.*, II-III.

(36) *Ibid.*, III.

(37) *Ibid.*

(38) F. Gourvil, *op. cit.*, p.202.

(39) *Ibid.*

(40) *Correspondance Luzel-Renan*, pp. 142-143.

(41) *Ibid.*, p. 145.

(42) F. Gourvil, *op. cit.*, pp. 203-204. なお、ここで引用した部分は、ルナン宛ての手紙で引用された部分と一部しか重ならない。